

3年2組

わたしの思い あなたの思い ～もなとはちとの暮らし～



見ようとしないと見えない景色

8月25日、3年2組に2頭目の羊さんをお迎えしました。お迎えした羊さんは人慣れしておらず、前田さんからは「1度逃げだしたら2度と捕まえられないと思います」と言われたことを子どもたちに伝えました。それを聞いた子どもたちは慎重にリードを付けて羊さんを外に出し、もなちゃんと対面させてあげました。対面直後はお互いにおいをかぎ合い、一緒に外の草を食べていました。その後、小屋に入れてみたのですが、もなちゃんが羊さんに何度も頭突きをしました。子どもたちは目を離すことができませんでした。「もう少し様子を見たい」とAさん。しかし、いつまでたっても2頭の距離は縮まりません。それを見たAさんは「もなちゃんは自分の家に知らない羊が来たことが嫌なんだよ。私たちだって知らない人が家に入ってきたらいやでしょ。怖いんだよ」と言いました。するとBさんが「教室に連れて行こう。狭いところで2頭を慣れさせよう」と言いました。そこで、教室に2頭を連れて行き、様子を見ながら授業を行いました。初めは距離をとっていた2頭も、徐々に近くにいることが増え、最終的には2頭が並んでいる時間が増えてきました。それを見たBさんは「やっぱり教室に連れてきてよかった。これで戻せるかも」と言い、2頭を小屋に戻しました。その後、ごはんの時はどうしても頭突きをすることがありますが、2頭が並んで扇風機の前で涼んでいる様子を見て、子どもたちも少し安心したようでした。

8月28日の1時間目。道徳の授業をしていると、4年生が「もなちゃんたちが脱走しているよ」と慌てて声をかけに来てくれました。その瞬間、空気が凍りました。「羊さんがいなくなっているかもしれない」という不安が教室全体に駆け巡りました。するとCさんが「行かなくちゃ」と立ち上がりました。子どもたちはすぐに赤白帽子をかぶり、教室を飛び出していきました。私が自然体験園にたどり着いたころには、子どもたちがすでにもなを捕まえていました。そして、その後ろにはまるで母親について行く子どものように、草を食べながら歩く羊さんの姿がありました。どうやらもなと一緒にいたようです。Dさんが配合飼料でもなを小屋の方におびき寄せると、羊さんもその後ろをしっかりとついて行きます。もなが小屋に入ると、羊さんも一緒に小屋に入っていました。2頭が小屋に入ると、拍手が沸き起こりました。安心した子どもたちはまるで一仕事終えたかのように、話しながら教室に向かって行きました。するとEさんが「あっ！雲！」と叫びました。見ると空には羊雲。「もしかしたら空にも羊の群れがいるって思って出て行ったのかもしれないね」と言いながら、教室に向かいました。



Eさんが羊雲を見てつぶやいた言葉に、私は深い思いを感じました。Eさんはいつも「私たちが幸せにしてあげるんだ」と口にしていました。その一方で、もなちゃんや羊さんは本当は群れの中で生きていたいのではないか——そんな気持ちを心のどこかで感じ取っていたのかもしれない。そして、群れから離してしまったのは自分たちであるということも、きっと分かっているのです。だからこそ、空に浮かぶ羊雲を見上げたとき、そこへ向かいたくなるもなちゃんと羊さんの気持ちを思い描いたのではないのでしょうか。

今まで気にも留めなかった羊雲。ですが、あの時見た羊雲は私にとって忘れられない景色となりました。



お友だちのしあわせを考える

もなのお友だちに名前を付けることにしました。「幸せに長生きしてほしい」という子どもたちの願いから初めは名前の候補が多く出ましたが、最終的に「はち」(30人)「はるな」(3人)「せな」(2人)の3つの名前になりました。しかしここからが大変でした。「みんなが納得した名前にしたい」という願いをもち始まった名前決めでしたが、話し合えば話し合うほど、子どもたちは自分の気に入った名前に固執するようになりました。そんな時、Aさんが「私は自分のつけたい名前から譲るつもりはない」と力強く言いました。この言葉を皮切りに「私も動かないよ」「俺もこの名前以外考えられない」と口々に話し出しました。それを聞いたAさんは「これは戦争。被害を一番少なくした方がいい。本当は被害がない方がいいけれど」と言いました。「誰かが譲れば…」とEさん。「移動して絞っていければ…」とFさんが言いましたが、だれも譲ったり移動したりする人はいませんでした。これ以上名前について語ることは、子どもたち一人ひとりが気に入っている名前に対する思いを今まで以上に強めてしまうのではないかと考え、名前の決め方について話し合うことにしました。「多数決は嫌な思いをする人が出るから最終手段にしたい」とDさん。「羊さんに決めてもらえば争いがないけれど、文字が読めないのに本当にそれで決定していいのか」とGさん。みんなが納得した名前にしたいという願いをもっているからこそ、名前の決め方にもこだわりをもっていました。そして子どもたちの決断は、「もう少し話し合いをすること」でした。その時、Hさんが「みんな自分の考えにこだわり過ぎじゃない？お友だちのことをもっと考えてあげようよ」と伝えました。

名前を1つに決める活路が見い出せずにいた私たちにとって、Hさんの言葉は改めて私たちが羊さんに名前をつける意味を問う言葉でした。

「自分が気に入った名前にこだわって、お友だちに名前をつけてあげられない。これはお友だちの幸せを本気で考えている姿と言えるのだろうか」そんなHさんの思いを感じました。そこで、私はお友だちが群れの中で過ごしていた写真や、初めて長野小学校に来た時に鳴き叫んでいた動画などを提示しながら、お友だちにとっての幸せを考える時間をとりました。Iさんは「動物にとっての幸せは、名前前で呼んでもらえることなのではないか」と語りました。そのためにできるだけ早く名前を付けてあげたい。そんな願いから「はるな」と「せな」がいいと語っていた5人が「はち」という名前に心を寄せ始め、35人全員が「はち」にしようと決めていきました。

しかし、「はち」がいいと願っていた子どもたちは、「本当にこれで決めていいのか」ということを語りだしました。Bさんは「今まで他の名前がいいとこだわっていた人たちが、本当に『はち』でいいとは思えない。はち『で』いいの？はち『が』いいの？」と問いかけました。するとJさんは、次のように語りました。

「私は『はち』に納得しているよ。今まで私の気に入っている名前についてたくさん受け止めてもらってきた。だから今度は私たちがみんなの思いを受け止める番だって思っている。今は『はち』という名前でお友だちが幸せになる未来が見える。みんなには納得していないように聞こえちゃうかもしれないけど、私は本当に納得しているんだよ」

自分のつけたい名前に強いこだわりを持っていた子どもたち。「戦争」「被害」という言葉が出てくるように、まるで争いごとのようになっていた名前決めが、「お友だちのため」を思うことで、私の在り方を見つめ直したのではないのでしょうか。そして、Jさんは、多数派の人たちが少数派である自分たちに心を寄せてくれていることに気づき、Jさんも多数派の人たちの気持ちに込めようとしたのではないのでしょうか。わたしの思いが、みんなの思いに込められている。Jさんはそんな思いを感じながら、「はち」と呼びに、はちのもとへと駆け出していきました。

